

**「健康医療とお金を巡る視点」**  
**ー地域活性化の新たなローカルファイナンスモデルから学ぶー**

**税理士**

**場所文化フォーラム代表幹事**

**場所文化機構副代表**

**「とちの・・・」大店長**

**ものづくり生命文明機構地域活性化協議会事務局長**

**吉澤 保幸**

**2009. 05. 21**

# 講演のレジュメ

## 自己紹介

### 第1部：持続可能な地域社会の構想と新たなお金（地域金融）の役割

1. 現在の金融危機の意味するもの－歴史認識と大きな対処方針
2. 持続可能な地域社会創出の意味－「冷たいお金」から「温かいお金」へ
3. 新たな地域金融の役割と仕組み－上手なお金の使い方と地域金融機関への期待
4. 地域活性化モデルと各地での取り組み
5. 新たな社会構想の実現に向けて－新たな多数派の形成と地域間連携の強化

### 第2部：健康医療とお金を巡る視点

1. 地域活性化の新たなローカルファイナンスモデルからの示唆
2. ローカルコモンズファンドの創出等と健康医療への応用
3. 持続可能な健康医療の構築を目指して
4. 検討会での当面のアクションプログラム

(参考1)とかちの・・・の意義

(参考2)利子に囚われない世界

# (自己紹介) 場所文化フォーラム(2003年8月発足)の概要

## ■ 「場所文化フォーラム」の目標

「場所文化」の創造によって、人々の新たな交流(地方と都市の新たな関係性の確立等)を促し、場所への資金流入と域内での資金循環の新たな仕組みを構築し、場所の自立(経済の活性化とコミットメント人口の増加、持続可能性の確保)を目指す。

## ■ 「場所文化」の戦略的意義(現代社会の変革のキーワードとして)

「場所文化」とは、行政区画に拘らず、自然に包摂された一定のローカル空間(場所)において営まれる人間の歴史的生活とそこでの自然との向き合いの中で紡ぎだされた言葉、景観、価値観、生活様式など(言わば風土)を言う。

「場所文化」は、画一化し、自然を破壊してきた近代西欧文明への警鐘と、各場所が持つ多様かつ自然と共生する価値観への転換という、強いメッセージが込められている。

## ■ 我々のアプローチは、場所の自立と都市との交流による自然との共生・循環モデルの構築

### ー場所文化を語り～場所文化を感じ～場所文化を創るー

- ①各地域での多様な「場所の価値」の再発見による自らの誇りの創出が起点(意識変革:ない⇒ある)。
- ②そして各地域が開きながら都市との対等・補完の関係を構築し、それを支えるヒト・モノ・情報の継続的な交流を可能とする新しいお金(志金)の流れを組み込んだビジネス・ファイナンスモデルを運営しつつ、場所文化を磨いていく。
- ③こうした各地の動き(\*)が連動し、地域が元気になり、都市の人々と共に自然との共生、自然の恵みやいのちへの感謝の価値観を日本社会全体が取り戻す。

(\*)連携の場所:十勝、金山、福島、高崎、勝沼、小田原、富山、愛媛、高知、熊本、鹿児島、etc

---

## 第1部：持続可能な地域社会の構想と新たなお金（地域金融）の役割

# 1. (1) 現在の金融危機の意味するもの—歴史認識と大きな対処方針

(現状の歴史認識)

●100年に一度の金融危機？

⇒否、現在の資本主義経済の根本的な有り方が問われていると認識すべき

⇒拡大再生産、グローバルゼーション、資本の論理、をラディカルの問うている

●なぜそうなったのか？

⇒拡大再生産に基づくグローバル資本主義＝西欧近代文明の諸問題、自己矛盾が噴出(貧富の格差、自然環境問題、食糧問題、倫理なきマネーゲーム等)

⇒ローマクラブ「成長の限界」(1972)の警鐘の具現化

●金融危機の具体的な意味とは？

⇒お金がお金を生むロジックが崩壊する一方、実態のある生活から乖離したお金の翻弄され、地域にお金が廻らない現実に直面している

●我々の課題は？

⇒無事で安心な暮らし＝いのちを紡ぎ、いのちを繋ぎ、いのちを伝える持続可能な社会、を現代のコンテクストの中で、どう描き、具体化していけるか

⇒行き着いた「資本の論理」絶対主義からどう脱却し、持続可能な社会をどう構築していけるか

# 1. (1) 歴史認識と大きな対処方針(続き)

(どう対処していくか? = 大きな処方箋)

●資本主義経済を補完する新たな社会的仕組みをローカルから創出していく

⇒持続可能な地域社会(光り輝くローカル群)と新たな地域金融の仕組みの構築を実現し、アジア等へ発信していく

<持続可能な社会とは、現世代内の公平/人間:自然との共生/次世代への継承が、一体不可分な発展状態>

①光り輝くローカル群の創出は、各地域の第一次産業を起点とする場所文化の創造に基づく都市と地域の交流モデル(=CB)の具体化による

⇒ヒト、モノ、そして自然の循環の再構築

②新たな金融の仕組みは、そうしたモデルを支えるお金の循環の創出による

⇒お金がお金を生む世界からの転換とローカルマネーフローの創出

●このためには、2つの前提を問う必要

①お金の根本を問う

⇒お金はいのちを繋ぐ道具にすぎないし、自らそれを創ることも出来るもの(次頁)

②国民国家の枠組みを問う

⇒国民国家間の調整に任せることは出来ない(次々頁)

●この2つを問い直し、新たな持続可能な社会像を具体的に描きだしていく、その時

⇒かつての共同体にあった様々な共同管理的仕組み(持続可能な社会の原型)が大きなヒント!

⇒いわゆる、自由の制御、倫理の復権も、新たな共同性(=コモンズ)の構築によって実現できる!

# 1. (1) 歴史認識と大きな対処方針(続き)

(お金なるものの本質)

## ●東京大学教授 岩井克人氏「貨幣論」(1993年)

- ・「貨幣とは貨幣として使われるもの」という自己循環法によってしか支えられない
- ・「世界化された資本主義の真の危機があるとしたら、世界中の人々がドルから遁走をはじめ、ドルを基軸通貨とする貿易金融体制が分裂解体してしまう事態に他ならないことを意味している」

## ●立教大学大学院教授 内山節氏(1997年)

- ・有用性という実体の無い貨幣が逆に実態を作り出してしまう近代国民国家の構図を論考し、「貨幣という憂鬱な必要財のもたらしたジレンマから」どう自由になり、有用性が力を持ち、人間の営みが力を持つ社会の創造を目指したい
- ・「貨幣は貨幣として生まれたことによって貨幣として成立した」

## ●独作家 ミハエル・エンデ氏(1993年)

- ・「お金はひとえに此岸の物質的手段として、地上の人間が作り出したものなのだ。だからお金の問題は純粹に地上世界の案件で、そのあり方は人間自身が決定しなくてはならない」

# 1. (1) 歴史認識と大きな対処方針(続き)

(国民国家の枠組みを問う)

●とちローカルサミット(2008、7.11～7.13):参加者

主催:帯広商工会議所青年部(帯広YEG)、場所文化フォーラム、NPOものづくり生命文明機構、NPO持続可能な社会をつく元気ネット

●ローカルサミット宣言(2008.7.13)

先進8カ国首脳会議が北海道・洞爺湖で開催された2008年7月、全国から志民が北の大地「十勝」に集まった。自然の厳しさと、広大で緑を中心にした色彩豊かな大地の息吹を五感で感じ取り、そのいのちの輝きに感謝しつつ、3日間に亘り、子孫から預かるいのち・地球の未来に向けて熱く語り合った。ここに参加者を代表し、全国、全世界の志民に向けて、次のように宣言する。

人類・いのち・地球が直面する危機は、グローバル資本主義に起因するところがあり、国民国家間の調整・協議のみでは解決できない。我々志民は、この危機感を共有し、これまでの延長線上に解決を求めるのではなく、忘れられかけている地域の仕組み、ライフスタイルの中に解決の手掛りを求める。日本がかつて有していた英知を学ぶことを通じて、生きとし生けるものを尊重し、循環と共生に立脚する「場所文化」を蘇らせ、発信し、連携していくことを宣言する。



## 1. (1) 歴史認識と大きな対処方針(続き)

蘇える「場所文化」は、利便性や欲望のあくなき追求をやめ、いのちの原点に立ち戻り、出あい、学びあい、助けあいに立脚する「ものづくり生命文明」を目指すものである。感動に裏打ちされた、志民によるこの実践を通じてこそ、いのちと自然の無事が図られ、地球の未来があると信ずる。

我々は、持続可能なローカル社会創出のため次の6つを実践する。

- ① 暮らしの起点を、いのちの原点である農林水産業におく。
- ② 環境保全は、森里海の連環から構想する。
- ③ 街づくりは、都市と農村との交流を組み込んだ農商工連携による。
- ④ 豊かさの源泉を利潤追求型の産業からエコファクチャーへと転換する。  
いのちの輝きに貢献するものづくりに従事していく中で、人々の労働意識は「稼ぎ」から「仕事」へと転換する。
- ⑤ 金融は、貨幣に換算しきれない価値を増価させる新たな金融の仕組みも創出しつつ、貨幣価値至上の主客転倒から脱却する。
- ⑥ 学びは、いのち・心を大切に、世代を紡ぐ伝統的共同体の教育力を再生し、活用する。

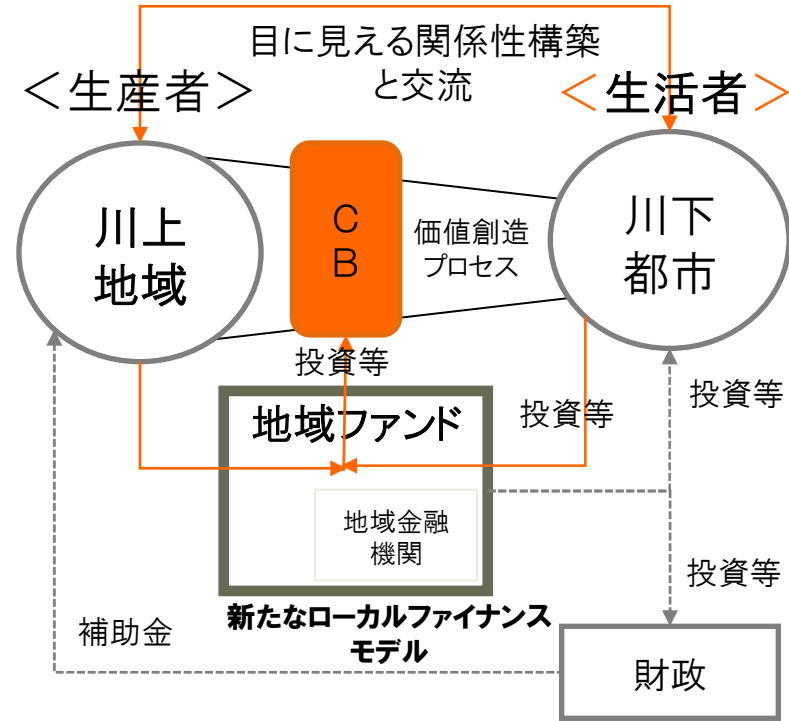
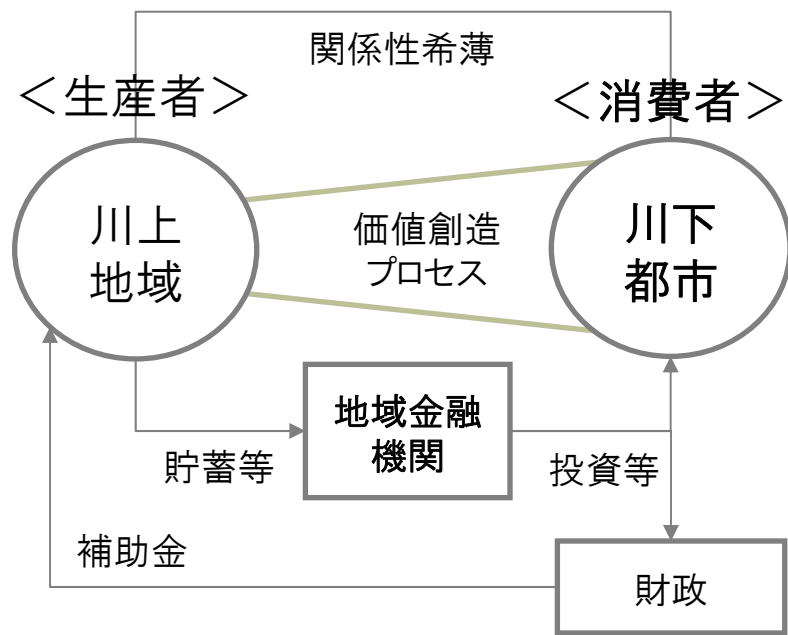
# 1. (2) 持続可能な地域社会の創出ー「冷たいお金」から「温かいお金」へ

## <社会構造の変化イメージ>

- ①. 地域活性化は、川下から川上へのヒト・モノ・カネへのシフトと可視化が鍵
- ②. 同時にそれを支えるローカルマネーフロー創出が不可欠

[現代社会の構図]

[我々の目指す社会構造]



## 1.(3) 新たな金融の役割と仕組み－従来の金融の論理の再考

(持続可能なローカルマネーフローの創出のために金融機能の再考が必要)

●新たなCB等の創出時に直面する課題の解決が必須

- ①リスク: 新たなCB等はスタートアップ事業ゆえ、通常は、信用・事業リスクが高く、立上げ困難
- ②リターン: 第一次産業関連事業等では、複利金利のキャッシュフロー創出は困難であり、上場益ということも期待薄
- ③時間軸: 第一次産業関連事業等では、最低でも数年～50年タームの資金ニーズ

⇒従来は、これらは、補助金や制度金融で賄われてきたが、それも限界

●CBやNPO活動等の運転資金への対応も不可欠

- ①第一次産業では、常に自然条件等に左右され、収穫時間や収量等での不安定性を抱える
  - ②中小零細企業も全般的なつなぎ融資ニーズは強い
- ⇒金融の相互扶助的色彩は、どんどん薄れて、貸し渋り状況にも直面

# 1.(3) 新たな金融の役割と仕組み－資本の論理を問う

(持続可能なローカルマネーフローの創出のための金融機能の再考)

● 以上の問題を解決していくには、お金がお金を生むこと＝利子の再考が鍵!

① 拡大再生産から「持続可能な経済社会」への移行では、複利の世界の修正が必須

－従来の生産関数は、毎年一定率経済が拡大していくことを前提⇒利子の源泉

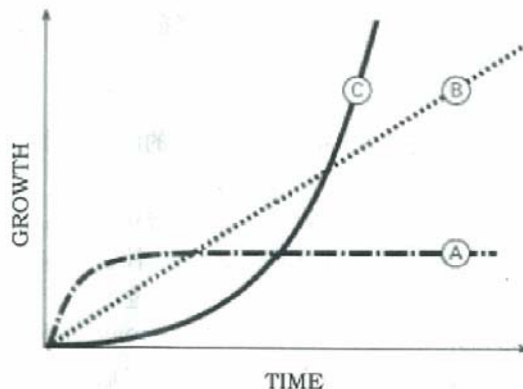
－しかし、 $Y$ (産出量) =  $K$ (資本)、 $L$ (労働)、 $T$ (技術)の3つの生産要素に基づくが、労働力増の限界、及びこれまで無限定としてきた自然資源の枯渇等から、技術革新の実現を困難にし、制約条件となって現れてきている。

－持続可能な経済社会に向け、改めて成長概念(環境と成長の両立)を問う必要!

⇒高金利・複利の世界の持続は困難!(名目金利 = 実物利子 + インフレ + リスク)

② マルグレット・ケネディ「金利ともインフレとも無縁の貨幣」による明確な説明

BASIC TYPES OF GROWTH PATTERNS



- ・A: 自然界の成長曲線
  - ・C: ガン細胞の成長曲線、現在の通貨システムの要求
  - ・現在の経済システムは地球上の全天然資源を食い尽くす運命に
- 引用: 廣田裕之「持続可能な発展向けの補完通貨」より  
原典: “Inflation and interest-free money”(Margrit Kennedy)

A. Natural curve  
B. Linear curve  
C. Exponential curve

# 1. (3) 新たな金融の役割と仕組みー歴史の実践、庶民金融からの学び

(歴史の実践からの学び)

## ●大恐慌時の実践からの学び

- ー大恐慌の処方箋として、欧米の成功事例があった！(P38～39)
- ー地域通貨の理論的原点(「減価するお金」と実践の意義(「高い流通速度」))
- ー日本の昭和恐慌の際の対応は、無尽、講の柔軟かつ相互扶助の仕組みの活用による(P42)

⇒今こそ、日本での実践の意義は大！＝利子に囚われない世界の具現化！

⇒地域通貨は、「資本の論理(貨幣の蓄積と自己増殖)」に囚われない志民自らが発行する自由貨幣であり、いのちを紡ぎ、繋ぐ、本来のいのちを廻す道具となる。

そして、そこには、従来のお金では換算されない価値も表出させることが出来る。

(欧米等での金融実践を踏まえ、庶民金融の原点に学ぶ)

## ●地域金融機関の原型からの学び

- ーすべての銀行が単一になってグローバル資本主義を支えるのが、金融自由化の枠組み
- ー日本の銀行が単一化する中で、欧米では、1980年代以降、マイクロファイナンスやソーシャルバンク、オルタナティブバンク等の進展による、多様な金融構造が顕在化しつつある(P41)

ー日本のかつての相互銀行/信金/信組は、金融自由化の波の中で存在意義が希薄化

⇒今一度、地域(庶民)金融の原点に立ち戻り、多様で柔軟な金融構造を構築すべき

## 1.(3) 新たな金融の役割と仕組みーお金の上手な使い方

(持続可能なローカルマネーフローの創出のための金融機能の再考)

●利子をはずした(利子無し、あるいは減価)時に見える金融の3つの帰結



お金を「稼ぐのでは無く、いのちの道具として上手く使うこと」を考える

- ①お金を「貯留する」大事な使い方:いのちを次世代に伝えるため(いのちの危機に備える)
- ②お金を「扶助する」温かい使い方:いのちを紡ぎ、温かく繋ぐため
- ③お金を「廻す」上手い使い方:いのちを紡ぎ、繋ぐためのエンジンとして



この結果、

- ①時間軸が換わり(長期の実物へのお金の貯留)、
- ②お金ではない形での報酬を頂き(農作物等の自然の恵みの交付)、
- ③相互扶助の役割を果たし、
- ④これまでお金に換算されなかった価値を表出させることも、可能になる。



お金は、お金を産むこと自体を目的とせず、CBの創出と事業継続、CBを起点とした新たな商流拡大によって、いのちのつながりといのちへの感謝・感動を産むことになる。



●こうしたローカルマネー創出を自ら見える形で廻すお金の作り方を構想、具体化する(その時、過去の事例に学ぶべきく使ってなんぼ！金は天下の廻りもの！>)

# 1.(3) 新たな金融の役割と仕組み—オルタナティブな金融の機能

(新たな3つの金融機能を組み込んだ新たな地域金融による補完の仕組みとは?)

## ① お金を「貯留」する新たな「投資モデル」—投資・リターンの変革

- ・時間軸は、10年以上を基本⇒実質的にお金を地域(第一次産業起点のCB等)に貯留する
- ・リターンは、0ないし超低利の単利+農作物等の現物優待⇒複利の金銭配当からの脱却
- ・投資者(志民ファンド)は、ハンズオンプレーンを組成する等して、CBの事業連携の具体化や経営支援・モニタリング、更には労役提供等を実施し、長期投資のリスク軽減を図る

## ② お金を「扶助」する新たな「つなぎ融資モデル」—現代版「講」の運営

- ・CBやNPOの活動資金の供給⇒現代に講のモデルを復活 (ex:20名×50=1000万円)
- ・融資の期間は半年～最長1年⇒補助金等の支出までの円滑な繋ぎ融資
- ・資金提供者は、利子に代わり、CBやNPOの活動の果実を様々な形で享受

## ③ お金を「廻す」新たな「他地域間志民通貨モデル」—農商工・都市連携による地域通貨流通

- ・地域内の農・商・工の連携+地域外志民への第二住民票交付
- ・他地域の志民通貨とのネットワーク化⇒ローカルがグローバルに繋がる展望
- ・お金を特別扱いさせず、いのちを廻す道具として、減価性を付与することも組み込む

⇒こうした新たな地域金融の仕組みを、地域金融機関も巻き込んだ形で、志民自ら作ることで、ローカルマネーフローの創出を加速させ、漂流する資本主義経済をきちんと補完していく

## 1.(3) 新たな金融の役割と仕組みー地域金融機関への期待

(地域金融機関との役割期待と連携の具体化)

- ①CBの事業規模の拡大や事業連携を進めていく上では、地域金融機関の持つ本来的な情報収集能力や目利き・経営支援力は必須⇒地域金融機関が、「地域活性化PJのハブ」になる
- ②ファンドや地域通貨運営上、他地域間連携も含め、地域金融機関が持つ金融ノウハウやシステム力、更には信用力は極めて重要⇒地域金融機関が、「志民のパートナー」になる
- ③地域金融機関は、かつての講や無尽等相互扶助の金融の仕組みからそもそも派生してきており、そこに今後の生き残り戦略を見出すべきではないか⇒地域金融機関が、本来の「地域社会への貢献」を実践できる

↓

こうした地域金融機関への期待の実践事例としては、愛媛銀行のえひめガイヤファンド(農業ファンド)がある(別添参照)

- ・同行は、農業ファンドを別のvehicleとして作り(5億円)、第一次産業を起点とするCBの創出を支援すると共に、企業間連携による生産物等の出口確保に銀行としての情報収集・移転機能を最大限発揮しようとしている
- ・なお投資条件は、通常長期融資金利での5～7年の投資(社債等)で満期一括返済、投資回収は上場益ではなく、リファイナンス拡大による

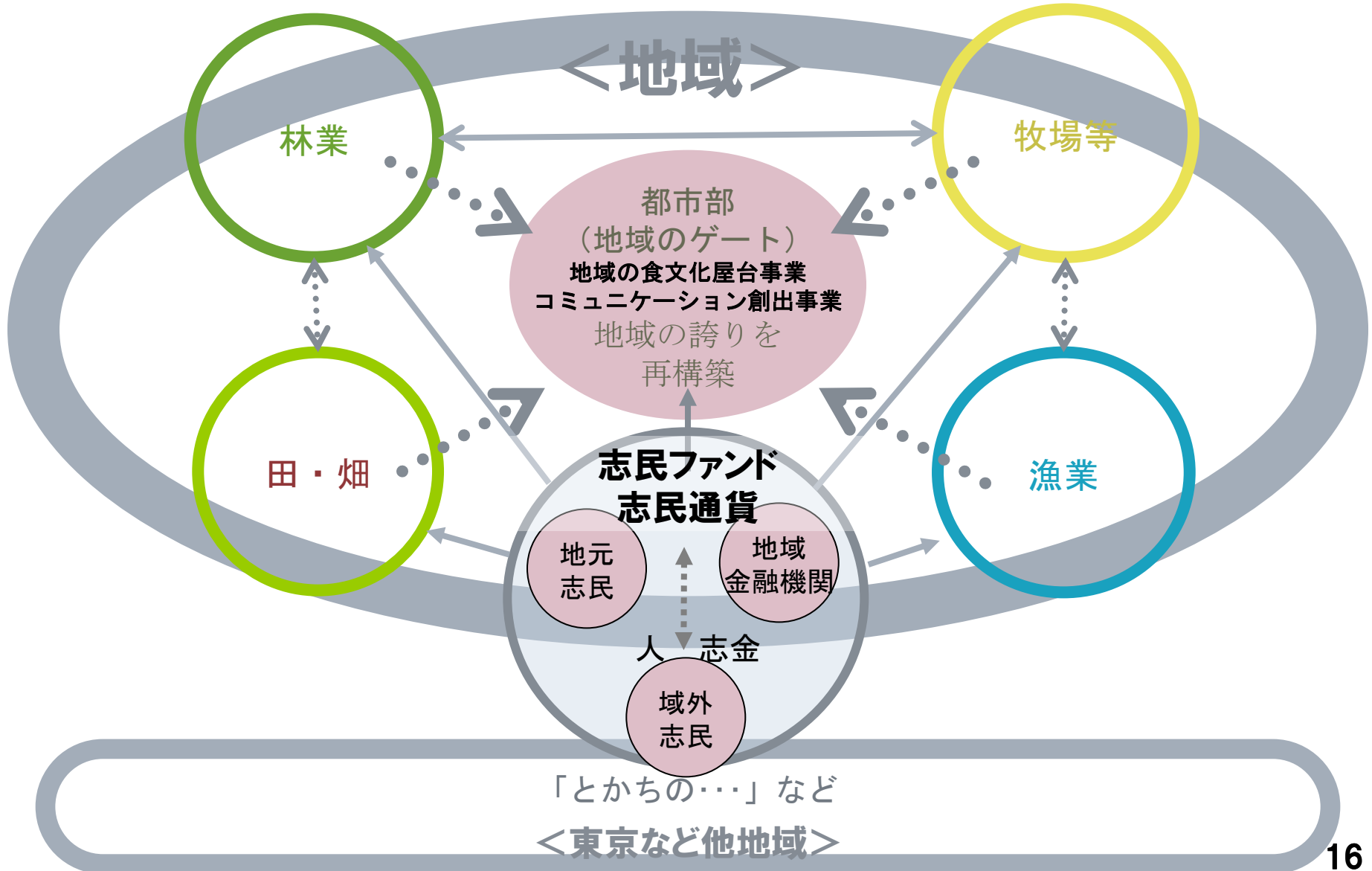
↓

そして、同行が関わる各種地域活性化PJを繋ぐ形で、同行と連携して愛媛地域の地域活性化モデル(P19)の具体化を鋭意検討中

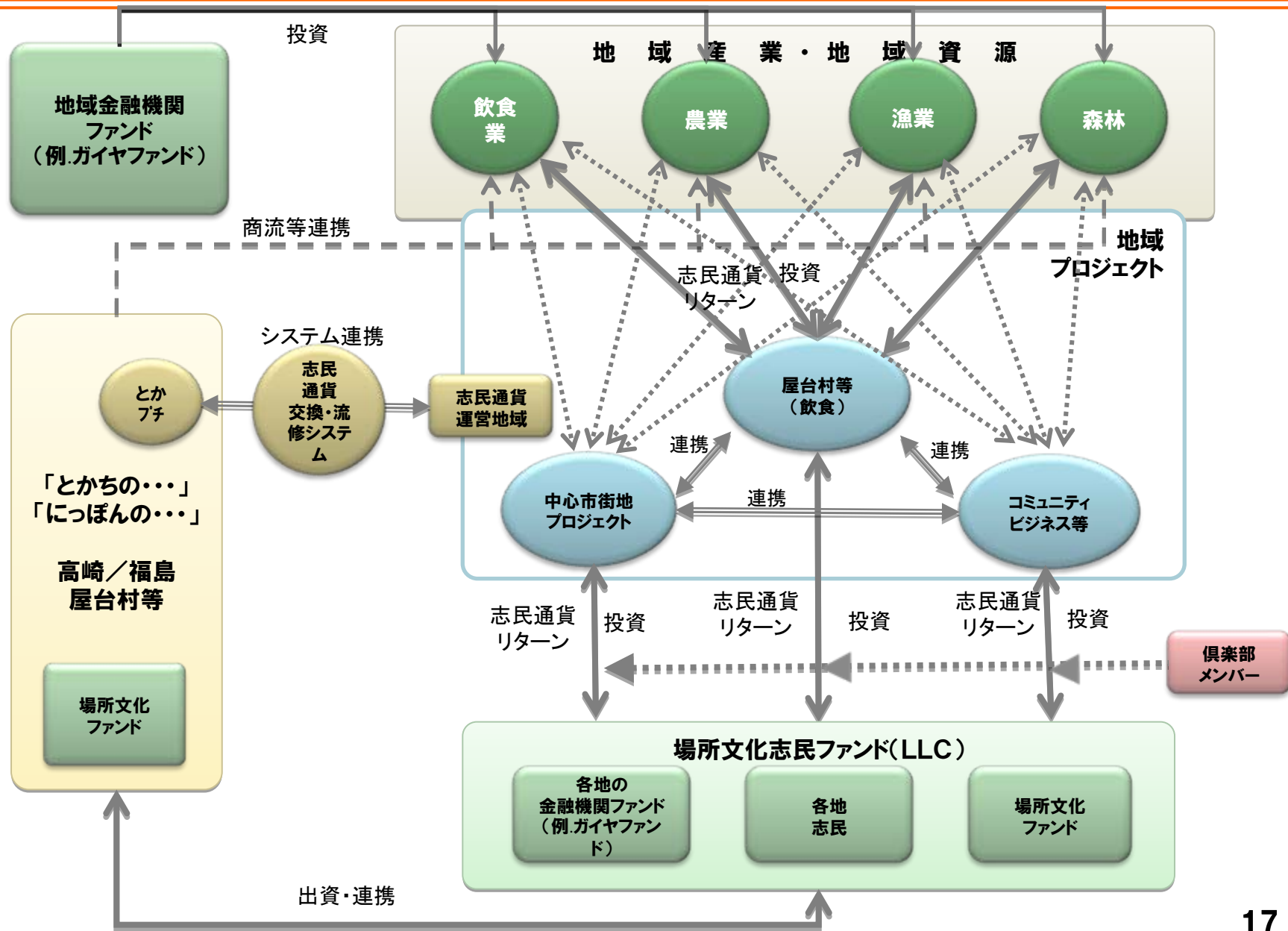


# 1.(4)地域活性化モデル

＜地域再生エンジンの3要素：農商工連携＋新たな金融の仕組み＋他地域間連携＞

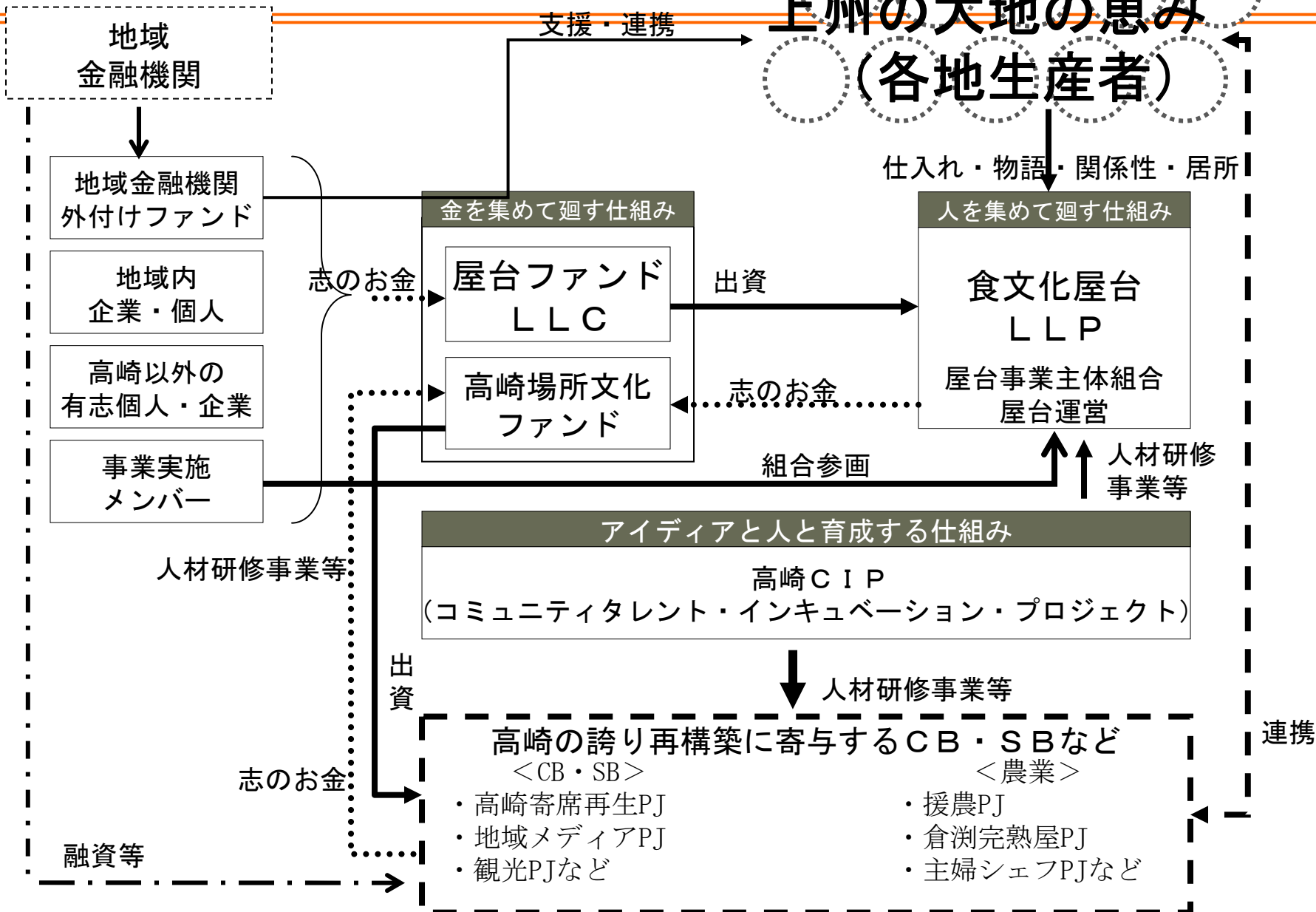


# 1.(4) 地域金融機関との連携による地域活性化モデル

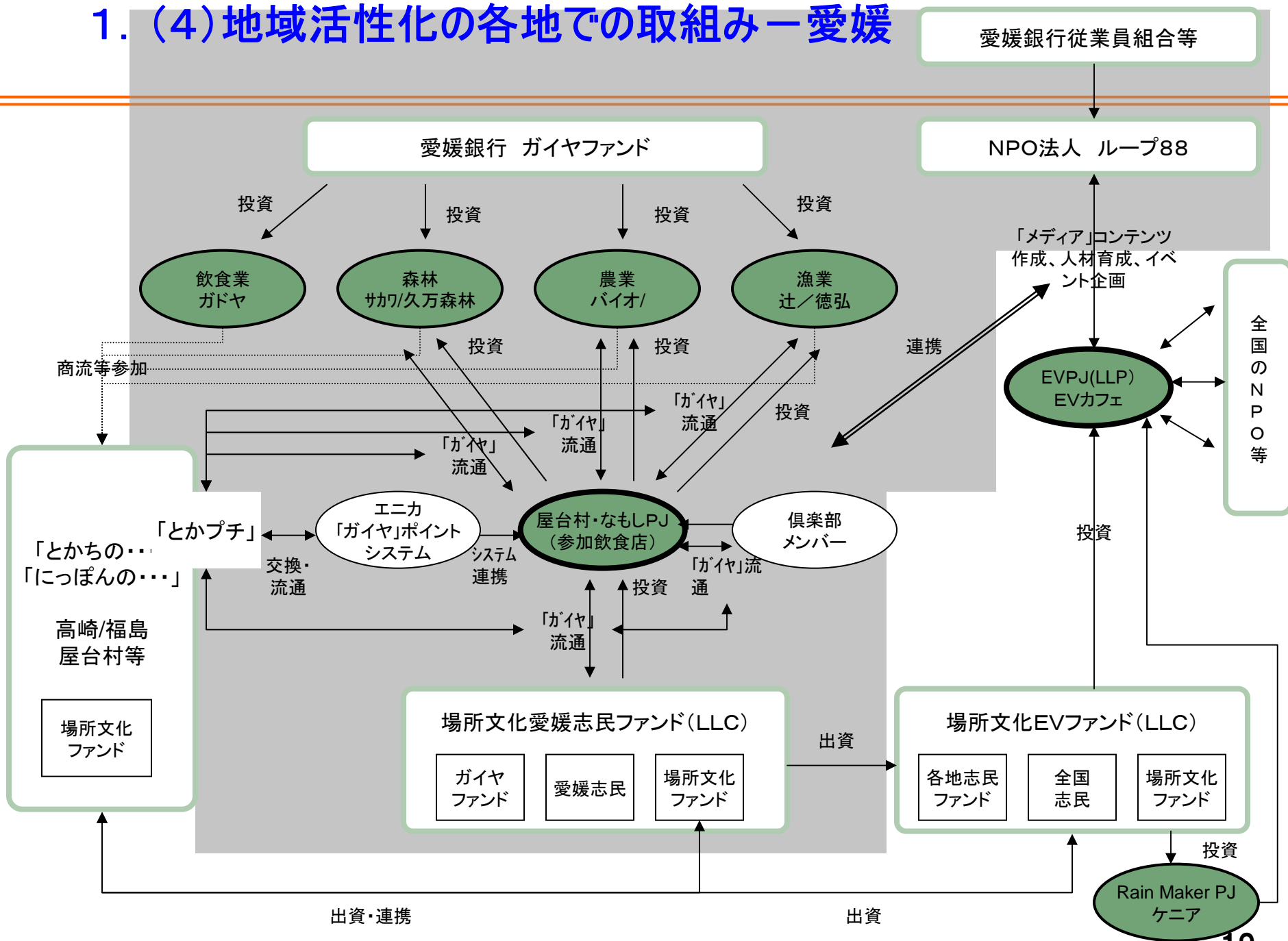


# 1. (4) 地域活性化の各地での取組み—高崎

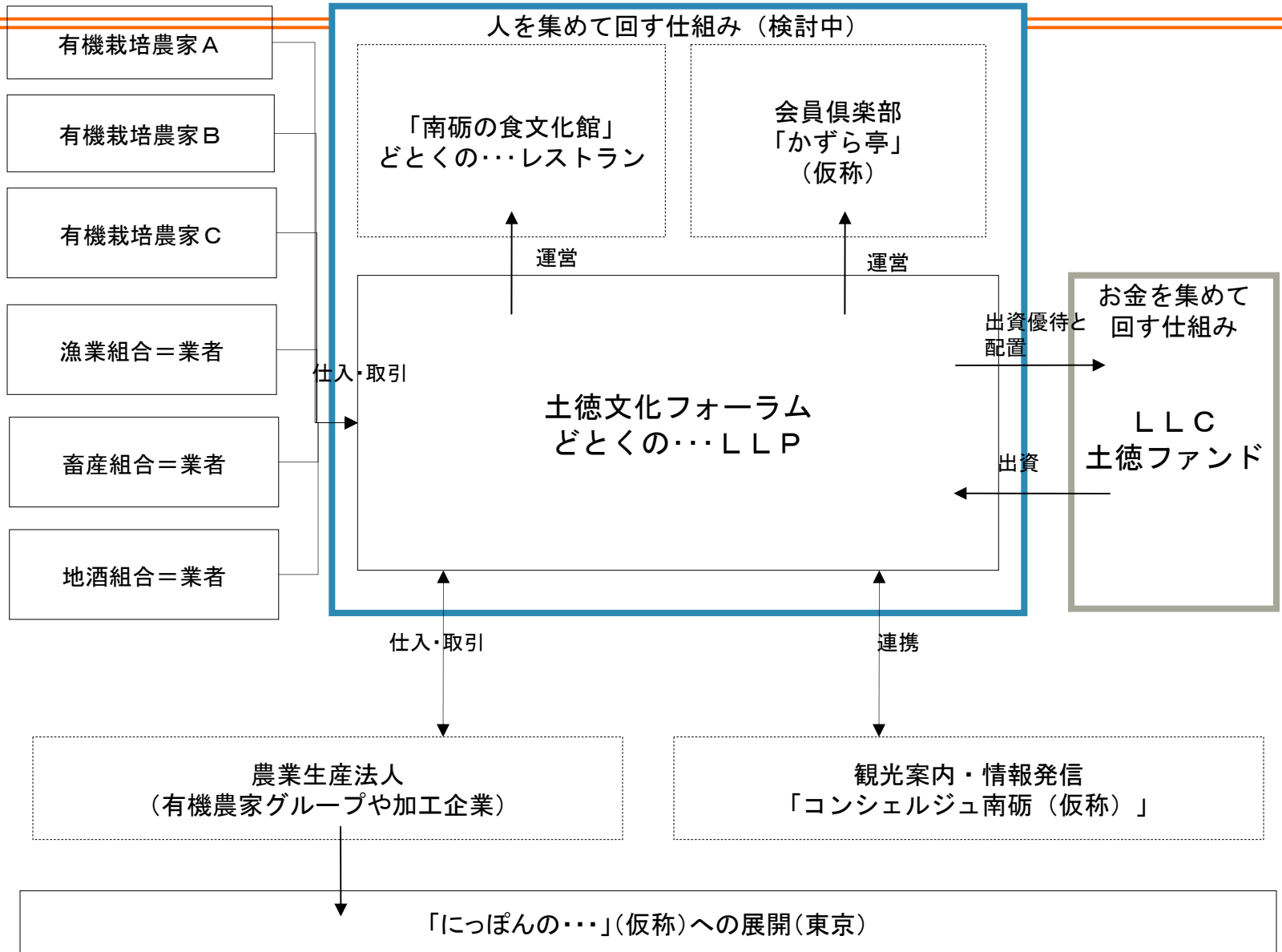
## 上州の大地の恵み (各地生産者)



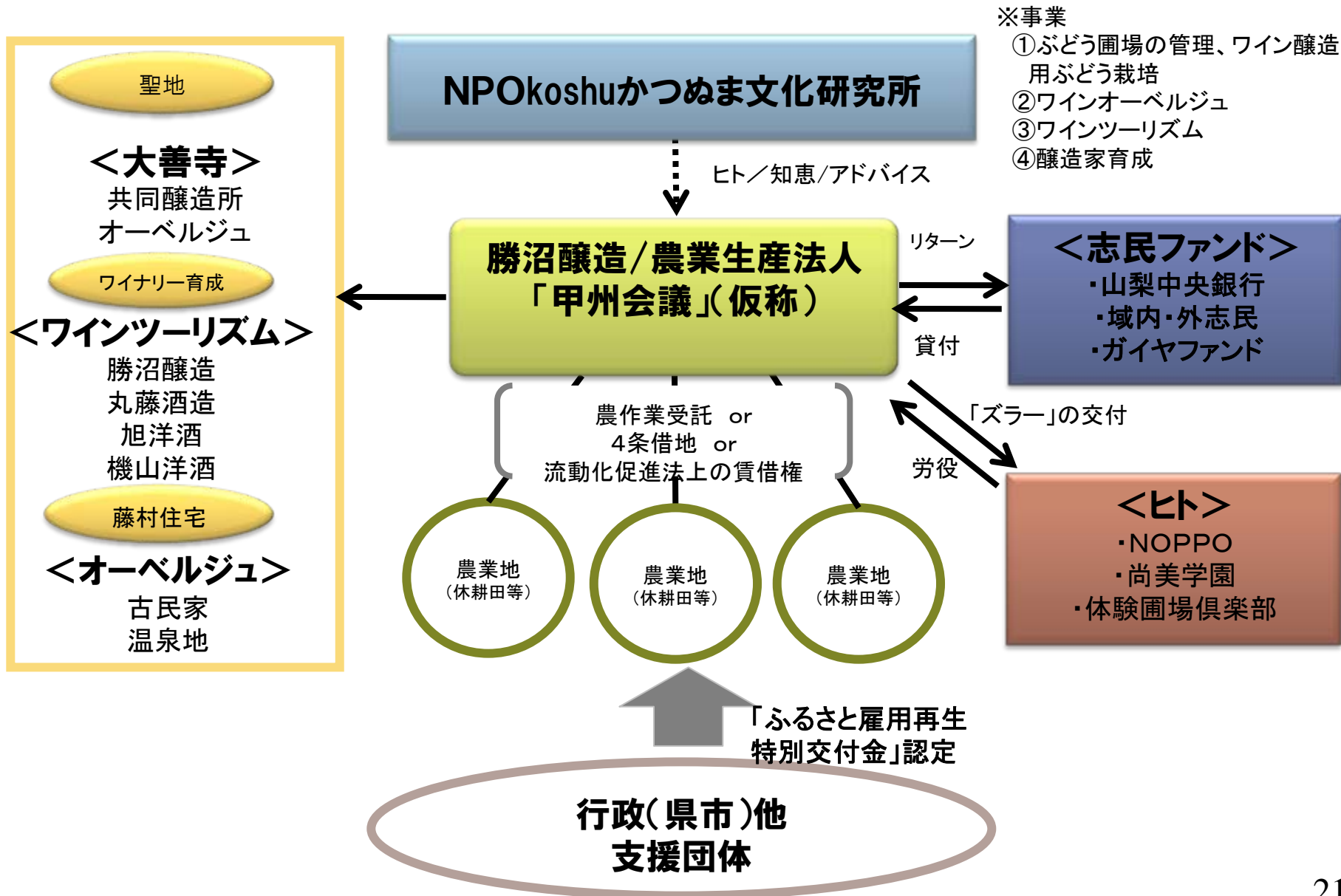
# 1. (4) 地域活性化の各地での取組み—愛媛



# 1. (4) 地域活性化の各地での取組み－富山・南砺

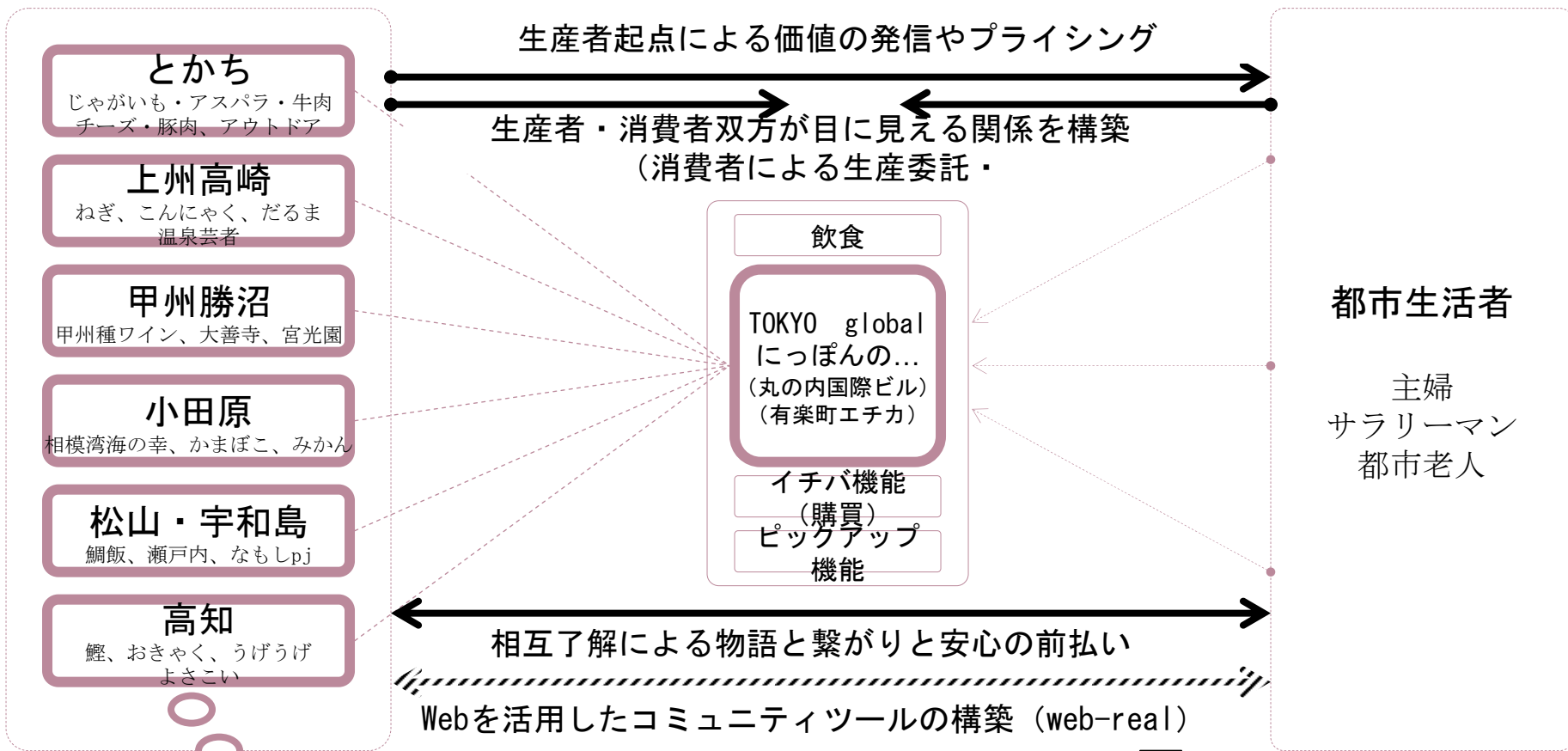


# 1. (4) 地域活性化の各地での取組み－勝沼



# 1. (4) 地域活性化の各地での取り組みー丸の内「にっぽんの…」構想

- ▽ 全国地方の個性溢れる魅力的な資源（人・産品・物語）と都市生活者とのコミュニケーションの場
- ▽ 両者の共有する「場所」となる販売・飲食スペースで構築される、相互了解と価値創造・需要創出
- ▽ グローバル東京は日本の元気の源泉であり、日本の地方を輝かせるマーケット



地域の農・商・工の粹を集めて、生活文化の価値を創造する主体=CIP  
 農産品を中心とした地域産品生産者や遊び、祭り、地域の宝をオーガナイズする場所文化を発信する活動組織

一人一人が主体的に地域と関わることで、地域の新たな市場価値が創出。一回だけの関係でなく、太い信頼で結ばれる。  
 →多様で魅力的な地域産品の拡大

## 1.(5)ローカルからの新たな社会構想の実現に向けて

- ①ビジョン/目標: 向こう3年間で、お金の翻弄されず、いのちが通い・いのちが繋がる社会システムをローカルから構築し、それがグローバルにも連携していくことを実現する。
- 全国、最低10箇所地域で、各10億円程度の規模の新たな仕組みが形成され、それが連携している状況を出現させると共に、グローバルな地域とも連携を具体化させていく。
  - 十勝、福島、高崎、勝沼、小田原、南砺、松山、宇和島、高知、等との連携

<150年前の社会構図>

家族 > ムラ > 交換・市

↓

<150年前～現在の社会構図＝個による競争社会>

個人 << 企業・国家 << 市場・マネー

↓

<新たな社会の構図＝自然との持続可能な共生社会>

いのち(自然と人間の共生)  $\geq$  共同性(コモンズ) >> 市場・マネー



# 1.(5)ローカルからの新たな社会構想の実現に向けて

## ②戦略・戦術:

ローカルからの持続可能な社会実現に向けた実践と連帯の輪の拡大

<3つの視点の変革を！>

### ●新たな共同性(=コモンズ)の構築

— 第一次産業を起点としたCB創出等による、都市と地域の交流、人間と自然との交感の実現⇒新しい共同性の組成

### ●新たな時間軸の構築

— 過去と今を費消するのではなく、50～100年の時間軸での価値の積み重ね・熟成の行動へ⇒過去を今に甦らせ、未来へのちを繋ぐ

### ●新たな金融モデルの構築(“ローカルコモンズファンド、ローカルコモンズカレンシー”)

— 志民ファンド・志民通貨と地域金融機関との連携による新たな金融の仕組みの具体化  
⇒自らの手で、お金を活かし、見える形で廻す

そして、

<新たな多数派の形成を！:「新たな多数派の思想の形成を目指す100人委員会」>

— 地域間連携による志民連帯と次世代への継承、そして国民国家の枠組みを越えて、ローカルとグローバルな繋がりの形成⇒新たな多数派を漸次拡大

---

## 第2部：健康医療とお金を巡る視点

## 2. (1) 地域活性化の新たなローカルファイナンスからの学び

(新たな健康医療のあり方を目指すためのキーワードの抽出)

● 拡大再生産、グローバルゼーション、資本の論理を問う

⇒ 無事で安心なお金に翻弄されない健康医療のあり方を具体化する

⇒ 米国型市場原理主義の再考、ローカルからの健康医療体制の構築、「文明の医療」から「文化の医療」へ(「冷たい医療」から「温かい医療」へ)、

● 持続可能な地域社会におけるオルタナティブ(補完的)な健康医療の論理と仕組みの模索

⇒ 従来の論理の再考: 医学・医療の分化から、心と体の統合的対応へ、保健・臨床・福祉・介護のトータルな運営、治す医療から寄り添う医療へ(「予防は治療に勝る」)

⇒ 過去の実践事例からの学び: 佐久総合病院等(メディコポリス構想等)の実践、プライマリ・ヘルス・ケア(アルマ・アタ宣言)の実践、キューバ等諸外国の事例

● お金の上手な使い方の実践によるお金に翻弄されない健康医療の模索

⇒ お金を「貯留する」大事な使い方: 長期的視野で「いのち」の大切さをもたらす研究開発を促す、医療保険を補完する新たな健康・医療基金(仮称)等の創出

⇒ お金を「相互扶助する」温かい使い方: 講・「ゆいまーる」や「グラミン保健プログラム」の応用

⇒ お金を「廻す」上手い使い方: エコマネーの活用(お金に換算されない感動・感謝の伝達可能)

● 新しい健康医療の価値観への転換

⇒ 健康医療は、いのちを紡ぎ、繋ぎ、伝えるもの: 輪廻、利他等も含むいのちの原点に立ち戻る

⇒ 健康医療は、患者と医師との間の強固な信頼関係も含む新しい共同体性の中で実現する

⇒ 健康医療は、お金をいのちを繋ぐ道具として上手く使いながら実践していく

## 2. (2) ローカルコモンズファンドの創出等と健康医療への応用

(新たな地域金融と連動した地域政策展開の類型)

①志民ベースによるCB創出と連動した志民ファンドと志民通貨の組成

②首長主導によるローカルコモンズファンド・志民通貨の創出(定額給付金のプール等、次頁参照)

③地域金融機関と自治体の連携による保健・医療・福祉・介護や環境保全施策の促進

— 中心市街地活性化計画等での高齢化対策(病院・医療・介護等)を念頭に、年金資金の活用をミニ公募県民債(無利子)等も組込んで創出し、高齢者に地域での相互扶助とお金に翻弄されない暮らしを実感できる医療・介護サービス等の仕組みを創出

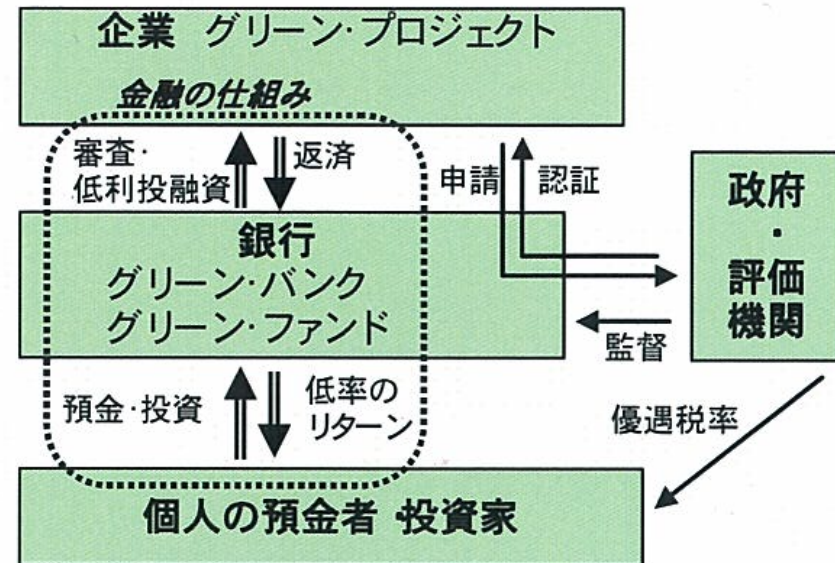
(次頁参照)

— オランダ(右下図)やイギリスのグランドワーク等の事例に学びつつ、日本版グリーン・ファンド・スキーム等を構築

— 農業向けCSA(次前支払い制度)の医療・福祉への応用

④医療保険・公的補助金を補完し、「いのち」の深化に資する先端医療開発等を支援する健康・医療基金(仮称)の創設

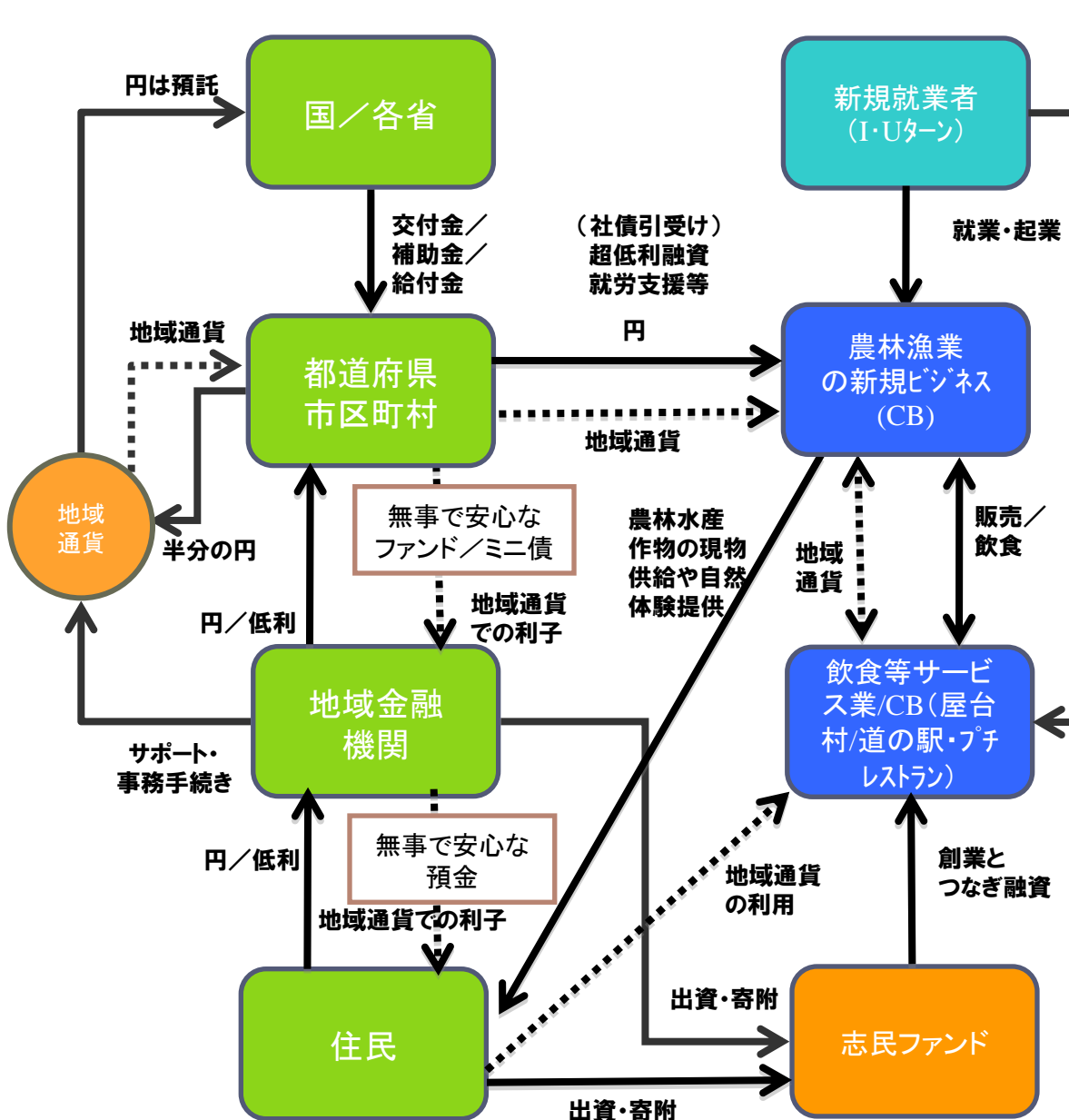
図表 グリーン・ファンド・スキーム  
(オランダトリオドス銀行による環境保全融資)



資料: 欧州ソーシャル・バンクの現状と信用金庫への示唆  
(信金中央金庫総合研究所 金融調査情報 19-11  
2008. 3. 12)

## 2. (2) ローカルコモンズファンドの創出等と健康医療への応用

### <地域でのローカルコモンズファンドの組成(第一次産業起点のCB創出を想定)>



#### <ポイント>

「CBをつくり、それを廻すお金をつくる。  
そして、それでCBをつくる」

- ・志あるお金と法定通貨の併用  
…志金は流通速度大で、商流拡大を牽引
- ・CB創出のために、従来の金融のロジックを修正する  
…長期/低利(割引)か無利子/相互扶助

#### <結果>

「雇用(百姓)の創出と第一次産業起点の  
ビジネス(ヒト・モノ)の拡大」  
↓  
「にぎわいと無事で安心な暮らしの創出」

#### <県/市でなすべきこと>

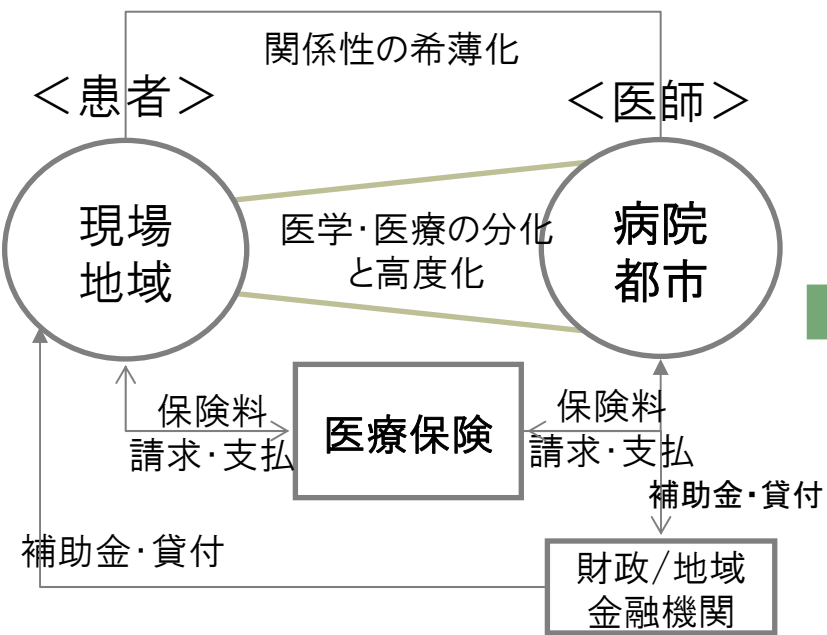
- ・強いメッセージの発出: 地域からの新たな構想、住民と一緒に作る“いのち”の循環
- ・行政のロジックの緩和: 単年度ではない中長期の視野での財政措置(税、支援金の条件緩和)
- ・行政やNPO等の連携: 地域通貨の最終出口等としての受け皿や非市場取引との連携を図ること

# 2. (3) 持続可能な健康医療の構築を目指して—新たな構造へ

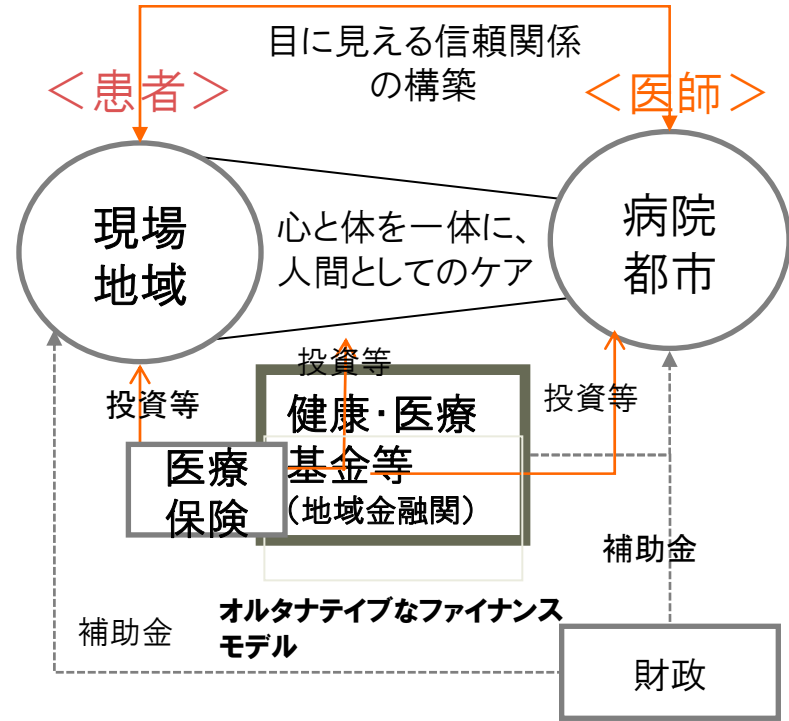
## <構造変化のポイント>

- ・医療のコモデティー化からの脱却と患者・医師の関係性の再構築
- ・医療・医学の分化から統合ケアへ

[現代の医療を巡る構図]

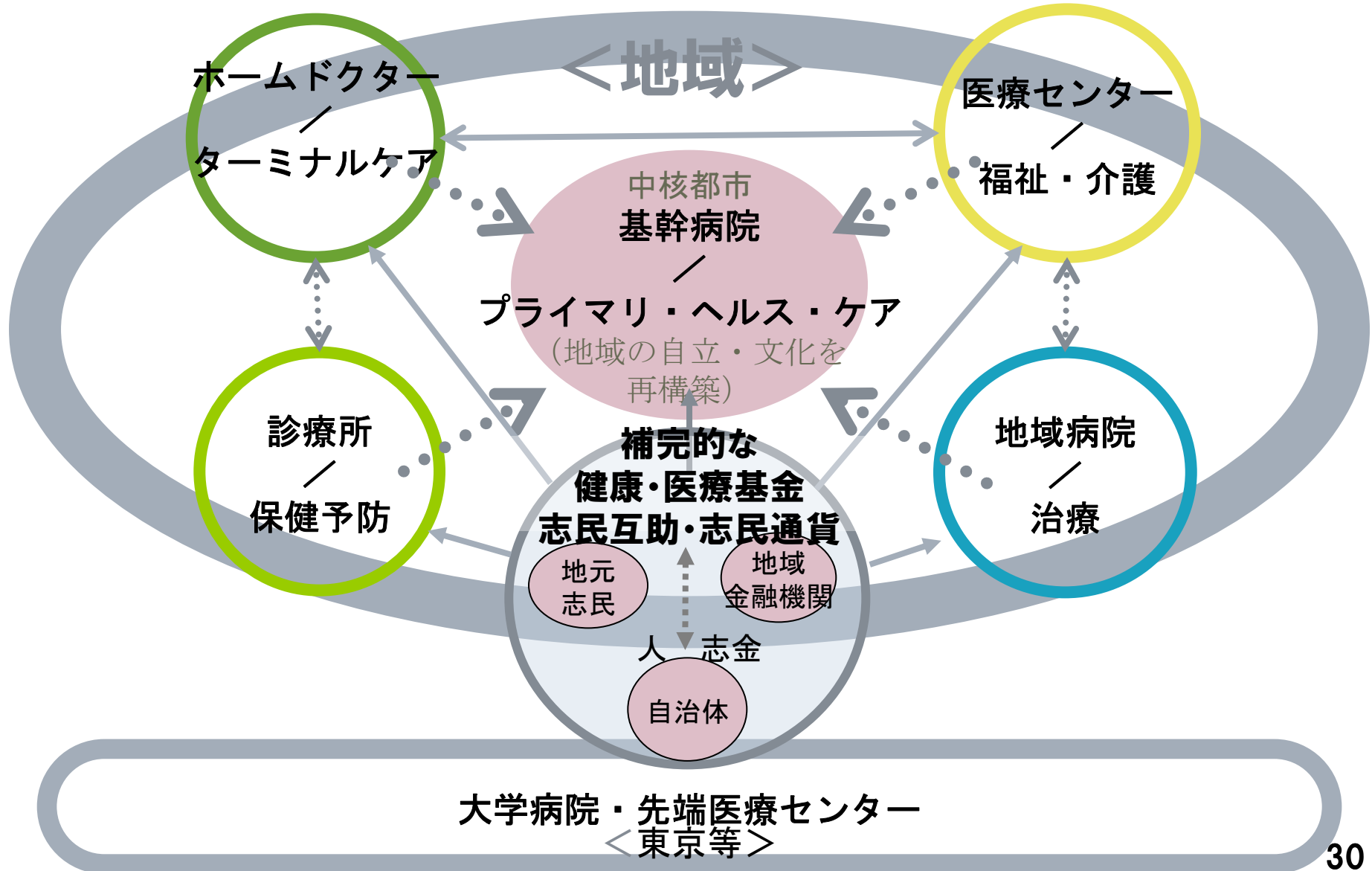


[持続可能な健康医療の構図]



## 2.(3) 持続可能な健康医療の構築を目指してー地域医療再生の構図

<地域医療再生の3要素:地域内機能連携+新たなお金の仕組み+他地域間連携>



## 2.(3) 持続可能な健康医療の構築を目指して

### ① ビジョン/目標

向こう10年間で、お金に翻弄されず、いのちを紡ぎ、繋ぎ、伝える健康医療システムを、ローカルから志民・地域金融機関・自治体との連携の中で、地域再生モデルに組み込み、全国で最低10箇所の地域で実現し、かつそれが連携している状況を出現させると共に、それをアジア等へ、プライマリ・ヘルス・ケアの実践例として発信していく。

一地域活性化の活動拠点(十勝、福島、高崎、勝沼、小田原、南砺、松山、宇和島、高知、等)との連携も視野に

### ② 地域再生における「いのち」の3分野連携の明確化

地域再生においては、「いのちを紡ぎ、繋ぎ、伝える」コモンス的活動としての「食・農」、「健康医療」、「教育」の3分野の連携を図り、それぞれ再生実現のために、お金を上手く使い、お金に換算されないところの営み・喜び(真善美)を希求していく。

「医は食に、食は農に、農は土(自然)に学べ」(公立菊地養生園・武熊名誉園長)

### ③ アジア等との交流活発化による貧困の克服と心・所得の再分配の実現

「日本は、かきくけこのうち、か(金)、き(機械)、く(車)は既に満たされていますが、け・こは、決定的に不足しています。『け』は健康で、『こ』は志です」(スマナ・バルア博士)

アジア等への貢献は、持続可能な健康医療モデルの具体化をベースに、ローカル同士の「心・志」と「お金」の交換による貧困の克服、世界的な富の再分配への実践による<sub>31</sub>



## 2. (4) 検討会での当面のアクションプログラム

### (検討すべきテーマ)

- ①医療崩壊の現状・現場把握：金融論、経営論、医療経済学的アプローチも踏まえて
- ②オルタナティブアプローチの模索：国内外の実践事例（過去の英知も含め）の分析・研究
- ③金融機関等との医療・福祉分野向けファイナンスに関する意見交換：地域金融機関も
- ④具体的健康・医療基金等のモデリング：地域活性化モデルとの連携も含めて

### (検討会メンバーについて)

・中井理事と協議の上、理事・会員・その他有識者をお願いしていきたい。総数10名弱。

### (当面のアクションプログラム)

- ・5月中：検討メンバー選出
- ・6月中旬まで：第一回検討会開催（メンバー間で、具体的スケジュール等を決定）
- ・7月中：第一回勉強会（講師候補：佐久総合病院色平哲郎医師、千葉大広井良典教授等）
- ・3ヶ月に2回程度の勉強会実施
- ・年内に中間報告会を開催：会員の方々との意見交換も含めて

## 終わりに

時は今、我々志民の手のなかに金融を取り戻し、  
持続可能な地域社会を新たな健康医療の姿と共に構築し、  
無事で安心な暮らしを実現していきたい。

いのちの原点に立ち戻った光り輝くローカルを紡ぎ、  
他地域との連携を図り、アジアを含むグローバルに繋がり、  
持続可能な新たな社会構想を具体化していきたい！

新たな健康医療のあり方を皆様と一緒に模索しつつ！

# (参考1)「とかちの・・・」(2007. 6. 27オープン)の意義

## (1)食による「場所文化」創造モデルの具体化(「とかちの・・・」オープン<6/27>)

食文化には、その場所文化が凝縮されているが、「とかちの・・・」では、十勝の豊かな自然に育まれた安心・安全の食材(野菜・お肉・チーズ等)や勝沼の国産ワイン等を作り手の拘わりや各場所の場所文化の語りを添えて、都会の方々に提供することで、

- ・十勝・勝沼等が持つ豊かな自然との営み、共生を実感し、
- ・健康で新鮮、かつ作り手の顔が見える安心な食材を食す喜びを得、
- ・その感動の対価としてのお金に新たな意味合いを認識し、
- ・「とかちの・・・」を起点に、十勝・勝沼と都市住民との新しい継続的交流が始まる



丸の内の、小さな十勝キッチン。

# とかちの・・・

tocacino

東京の真ん中に、北海道・十勝の食を  
楽しんでいただくお店ができました。  
北の大地でのびのび育った農作物のおいしさを、  
まっすぐに運びます。  
元気になれるものが食べたいとき、  
ちょっと寄り道気分とき、  
仲間とワイワイやりたいとき、  
ぜひ、お立ち寄りください。

東京都千代田区丸の内3-1-1  
国際ビル地下1階 〒100-0005  
(TEL) 03-3214-1007  
月～金 11:30～23:00 (22:30 L.O.)  
土 11:00～22:00 (21:30 L.O.)  
日曜日休み  
[www.tocacino.com](http://www.tocacino.com)

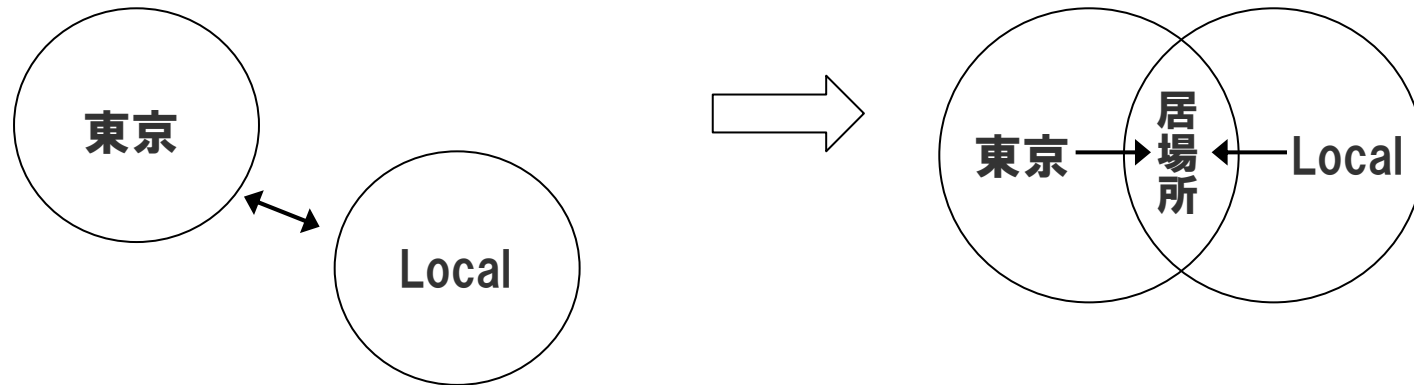
丸の内線 日比谷駅 B1  
有楽町線 有楽町駅  
国際ビル  
東京国際フォーラム  
ビックカメラ  
JR有楽町線

アクセス  
JR有楽町駅より徒歩2分  
東京メトロ有楽町線有楽町駅 直結  
都営地下鉄三田線日比谷駅 直結

## (参考1) 「とちの…」で実現しつつあること

### ①「地方」対「都市」という格差意識を超えた新しい場所意識の形成

- TokyoにLocalな居場所を作る(東京人にとっては、Localな居場所となり、LocalにとってはTokyoを自らの居場所にする)



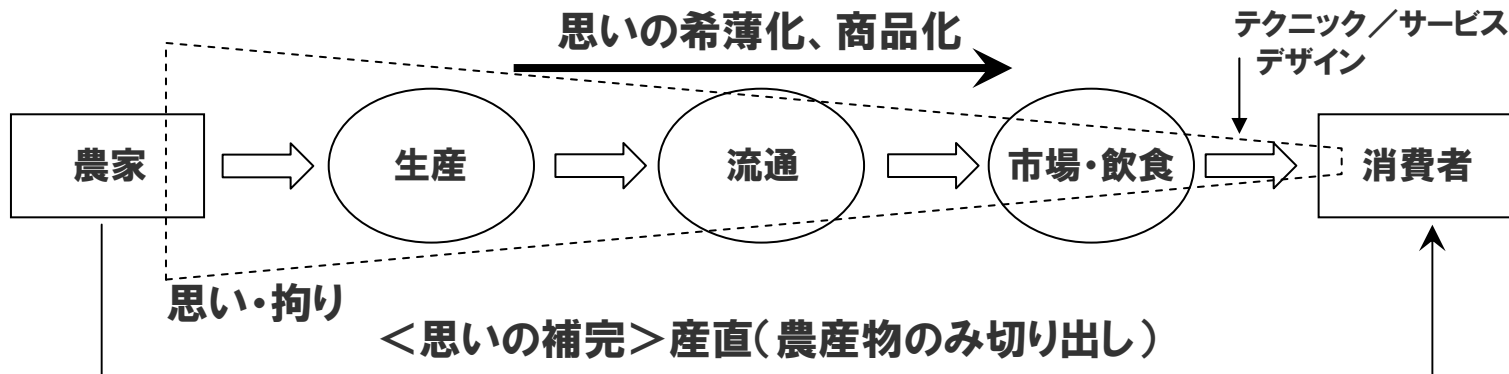
### ②日本の地域・自然に根ざした食文化・酒文化の再発見と再確認

- Localな食を、テクニクではなく、生命の産物として提供する凄さ  
(都市の料理とムラの料理の違いの重要性)
- 日本の食文化と酒(ワイン)のコラボレーションによる酒文化の再生  
(とちのは、和飲場<ワインバー>)

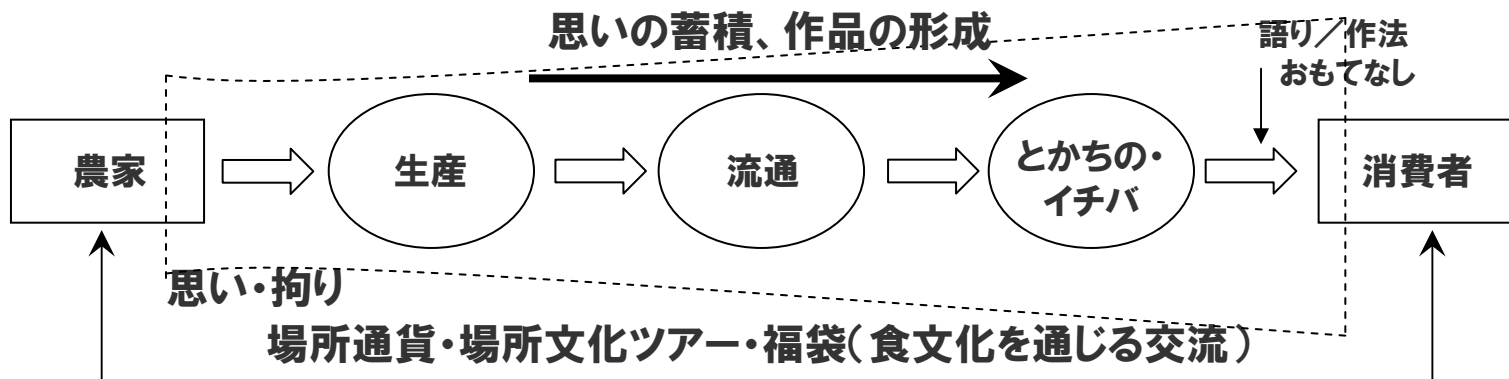
## (参考1)「とちの…」で実現しつつあること

### ③「産直」とは違う場所の食文化の表現(=新たな農生産～流通～消費の仕組みの形成)

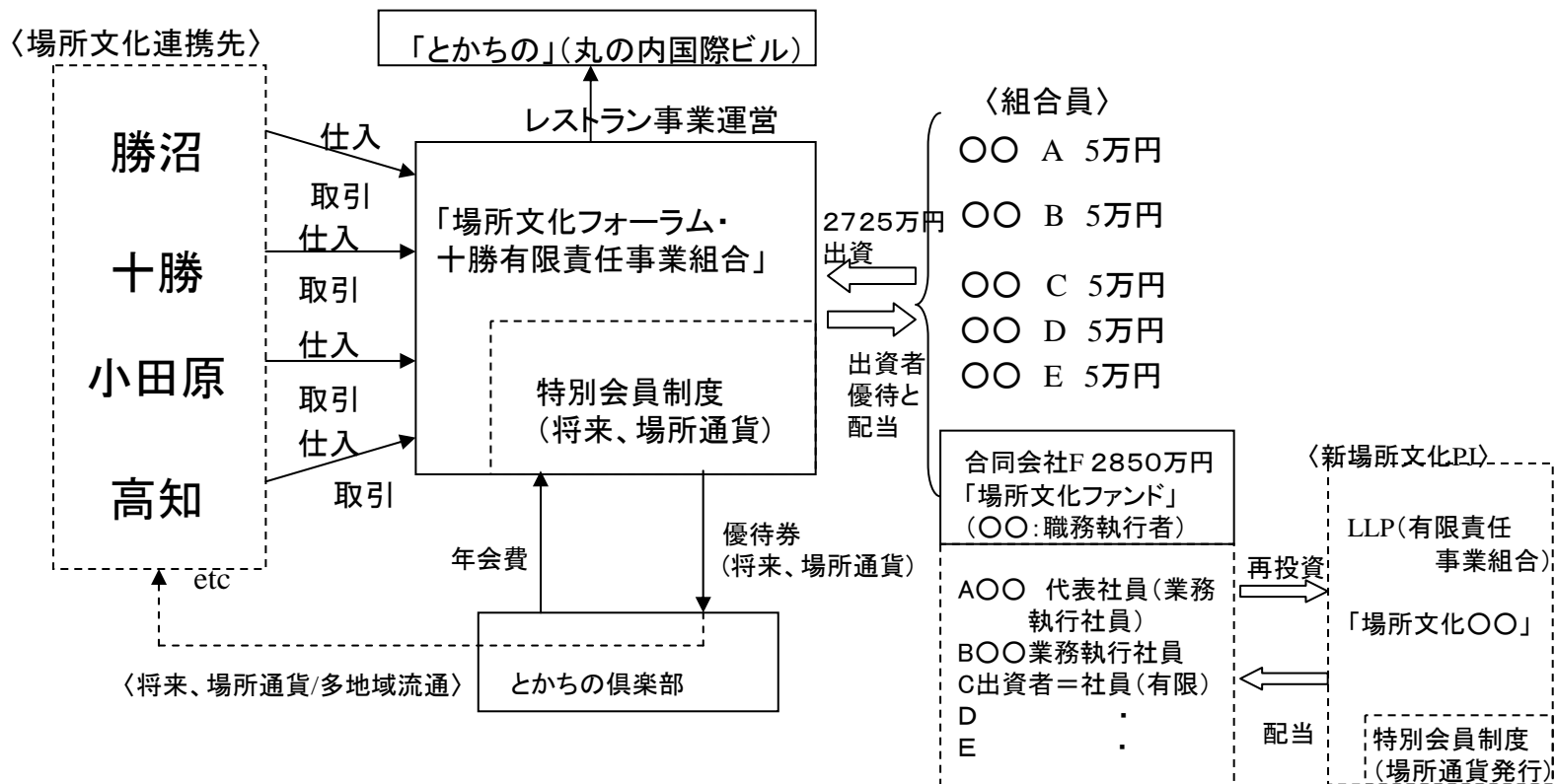
<従来の市場・飲食> ; 対価の意味 = 希少性、調理、サービスへの充足の対価(交換価値)



<とちのイチバ> ; 対価の意味 = 自然の恵み、農への感謝、感動の表現(使用価値)



# (参考1)「とかちの・・・」での新たなビジネス・ファイナンスモデルの創出



## <3つの特徴—新たな金融・地域通貨モデルの構築>

- i 運営主体(LLP)と投資主体(LLC)の分離と連携の具現化—ビジネスと意思の両立
- ii 意思の伝わる資金フローの確立—場所の価値の出資者優待と場所通貨の連携可能性
- iii 他地域展開を想定した再投資スキームへの展望—長期的資金循環(貯留)の実現

## (参考2). 利子に囚われない世界！地域通貨等の実態

(利子に囚われない世界とは？地域通貨等の実態)

●理論的には、シルビオ・ゲゼルの自由通貨論やケインズの国際通貨構想

「財が時間と共に劣化していくように貨幣もまた劣化しなければならない」(ゲゼル)

— 下記の地域通貨の実践の理論的バックボーン(ケインズが大きく評価！)

「マイナス利子率の国際通貨・バンコールによる国際清算同盟構想」(ケインズ)

— 黒字国はマイナス利子が課されるため、対外交易を加速させ、国際収支均衡維持を目指す

●利子に囚われない金融は歴史的にも実在した

< 欧米の事例 >

①古代エジプトや中世ヨーロッパでは、定期的な減価の改鑄により、人々は農地改良やカテドラル建築にお金をつぎ込んだ

②大恐慌での超デフレへの対応として、欧米で成功事例がある

・独シュヴァーネンキルキンの「ヴェーラ」: 炭鉱労働者への2/3給与支払い、毎月2%のスタンプ添付、村全体が活用し、活況へ(労働者→商店→生産者→石炭購入)

・澳ヴェルグルの「労働証明書」: 町の公共事業へ雇用し、賃金の半分を支払い、毎月1%の切符添付、完全雇用を達成、他地域200でもこの仕組みを活用

## (参考2). 利子に囚われない世界！地域通貨等の実態

・米でも I・フィッシャー教授のゲゼル理論支持もあって、全国各地(4000以上)で地域限定の地域通貨(緊急通貨)が発行された

⇒しかしいずれも、効果があったため、中央銀行や大統領によって禁止された

③ 当時から現在まで残る地域通貨は、スイスの「WIR(ヴィア)」銀行である

・1934年、16名のメンバーで協同組合として設立、36年には銀行法が適用、98年には、WIR銀行と名称変更。約8億WIR=スイスフランの発行額(GDPの1%弱)

・会員はスイスの6万以上を超える中小企業や零細商店

・金利無しの補完通貨で、会員は、入会金、年会費、各取引手数料等を支払い

・WIRは会員同士の売買と融資により取得、会員は通常金利より相当程度(1%強)低利のWIR融資を受けることが出来る

・1995年には、スイスフランとWIRの両方での支払い可能なカードが発行されている(スイスフランがクレジット機能、WIRはデビット機能付与)

④ 1980年代以降の地域通貨

・タイムダラー(1986、米): 1h=1ドルの時間預託制、口座方式、無利子、併用不可、交換不可

—200団体5万人、加、仏、日本(ふれあい切符)、ボランティアサービス中心



## (参考2). 利子に囚われない世界！地域通貨等の実態

- ・LETS(local exchange trading system、1983、加):ゼロ勘定開始、会員相互間の提供したい財・サービスの交換を記帳、口座方式、無利子、価格自由、併用可、交換不可
  - ー先進国2000地域、SEL(仏)、交換リング(独)、日本「おうみ」、「ピーナッツ」等
  - ー企業やNPOも絡めた「コミュニティー・ウェイ」は、この発展系(日本「アースデイマネー」)
- ・イサカアワー(1991、米):1イサカアワー=労働1時間=10ドル、管理委員会発行の紙幣方式、無利子、併用可、交換不可
  - ー生協からスタートし、食料・雑貨関連500店舗程度も加盟、信用組合も参加し、ローン(無利子)も可能、無農薬農業支援融資も実行、1300人の会員、発行額10百万円
- ・トロントドル(1998、加):1トロントドル=1カナダドル、1カナダドルからの交換時に10%をコミュニティー基金へ寄付、紙幣方式、価格自由、併用可、交換可能、使用期間有
  - ー市長、経済団体の支持を得て、交換等は銀行の支店やマーケットの交換所で可能、150店舗等で利用可能、発行額は13万トロントダラー≒10百万円、
- ・RGT(グローバル交換リング、1995、アルゼンチン):交換市専用の取引券、として、一時は、500万人が活用したが、リサイクル商品と食料品に限定され、企業間向け取引の仕組みが入っていないこと等から、消滅

## (参考2). 利子に囚われない世界！地域通貨等の実態

- ⑤1980年代以降のローカル・ソーシャル・ファイナンス(経済的利益のみならず、環境、社会、倫理的側面を重視して活動する金融機関)
- ・グラミンバンク(バングラデシュ、1970～): 世銀等からの借入を原資に、貧農女性等へ小口に融資、特徴は、連帯保証と銀行の地域支部(NPO)による技術支援での返済可能性確保、金利は相対的にかなり低利
  - ・ピアレンディング(加)や担保組合保証制度(伊)も同様に、信頼と評判による信用供与  
⇒いずれも、日本の講や無尽と同じ発想
  - ・ソーシャルバンク(トリオドス銀行<蘭>、倫理銀行<伊>、CDFIs<米>)  
: 預金者が低利、ないしゼロで銀行に預金し、銀行は地域の小プロジェクト等に低利で融資可能(税制上の優遇等も後押し)  
⇒自分の意思で資金用途を決めたい預金者の存在が鍵(日本のNPOバンク等も同様)
  - ・オルタナティブバンキング(WIR銀行<スイス>、JAK銀行<デンマーク、スウェーデン>):  
WIRは前掲、JAKは国民通貨を活用  
— JAKの仕組みは複雑であるが、基本は事前の無利子貯蓄による事後借入(融資手数料は運営コストとして支払う)というスキーム  
⇒ JAKの仕組みも日本の積金担保借入と類似

## (参考2). 利子に囚われない世界！地域通貨等の実態

### <日本の事例>

- ①日本における利子は、そもそも神事の「利稻(収穫の供え物)」から発生したもの
- ②古くから「結い」「講」「無尽」(＝相互金融、保険)などの相互扶助の仕組みや藩札等に見られる地域通貨が存在
  - －「講」等は、宗教、娯楽、相互扶助の3要素を持つが、利子については、かなり個別性が強く、代参による棒引きという仕組みも存在。現在でも、無尽等は、金融色を排除した形で広く現存(飲み無尽等)。かつての「ツケ」も相互信頼のもとでの信用の手段。
  - －沖縄の「ゆいまーる」による共同店(生協と農協の機能を持つ、かつて116店が現在70店へ)の仕組み(出資、奨学金、無利子融資、診療所等への利益金の活用)が参考になりうる。
- ③先人達による様々な形でのお金の貯留の事例が存在
  - －300年の美林(金山町等)、100年の芝居小屋(八千代座、内子座等)、数百年の別院・土蔵(富山南砺)等
- ④1970年代以降の地域通貨(2000年前後から急速に拡大、現在、600強の実例)
  - ・1973年ボランティア労力銀行(大阪)が先駆的、バブルの崩壊、そしてその中での、諸外国の事例紹介、更に、地域振興券の配布や、1999年(5/4)の「エンデの遺言」放映後導入加速、しかし、その後下火に。
  - ・当初の福祉・ボランティア活動の促進目的(いわゆるエコマネー)から、地域活性化や広域的な地域の自立目的の事例は僅少
  - ・エコマネー系: ZUKA(宝塚)、クリン(栗山町)、LOVES(大和市)、等
  - ・地域活性化系: おうみ(草津市)、ピーナッツ(千葉市)、アースデーマネーr(渋谷)

## (参考2). 利子に囚われない世界！地域通貨等の実態

- ・おうみ：1999年、LETS系、コミュニティーセンターの利用券から相互扶助システムとして発展、その後、私企業(タクシー会社等)の関与が進み、2000年から地域通貨おうみ委員会が設立された。更に、2002年10月からは、NPOや商店街と連携した「おうみありがとう券」が発行、いずれも、紙幣方式、1おうみ=100円、併用可、交換不可、年会費500円で5おうみを受け取る
  - ーおうみファンドを設立し、各種NPO団体等に貸付等を実施
- ・ピーナッツ：1999年、商店の活性化と地域助け合いを目的にスタート、LETS系、通帳方式(大福帳)、プラス残高は月1%の割合で事務局が手数料として徴収、併用可、交換不可、1ピー=1円、1000ピー=1時間、会員1600名程度
  - ー現在は、WEB上での取引も開始、消費税は円貨支払い
- ・アースデーマネーr：2001年、地域活性化と地域貢献活動を目的にNPO法人「アースデーマネー・アソシエーション」が発行・運営主体としてスタート、コミュニティー・ウェイ系、1r=1円、併用可、交換不可、円の寄付等によってrを取得、チケットとカードの併用
  - ーIT化が進んでおり、携帯でのアースデーマネー利用も可、運営主体は、8つの渋谷プロジェクト(渋谷川グッドデザイン計画、ゴミゼロ運動、都市・農村交流等)を支援
  - ーrを使えるカフェ「gabowl」(渋谷)をオープン、会員数800名程度、発行額100万r

# (参考2) 利子に囚われない世界一志民通貨デザイン(苫前町)

## <苫前町地域通貨の概要:2004・11~2005・2>

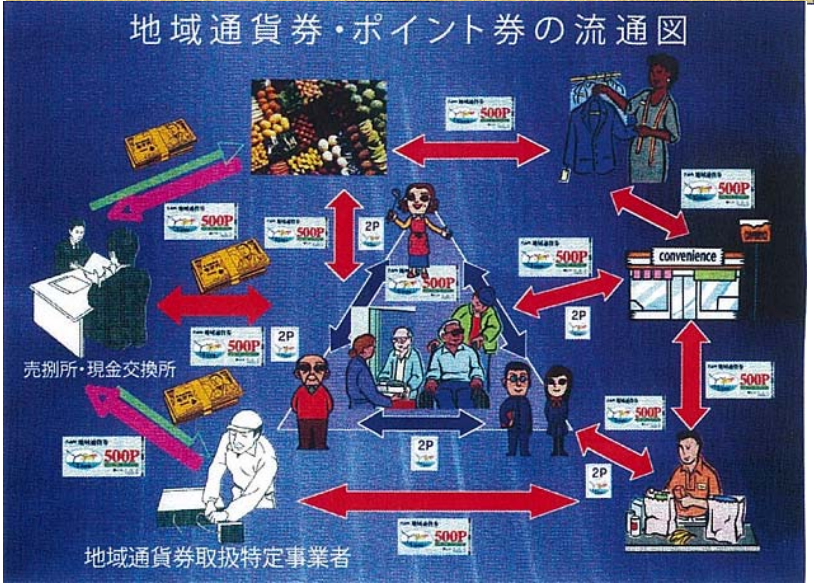
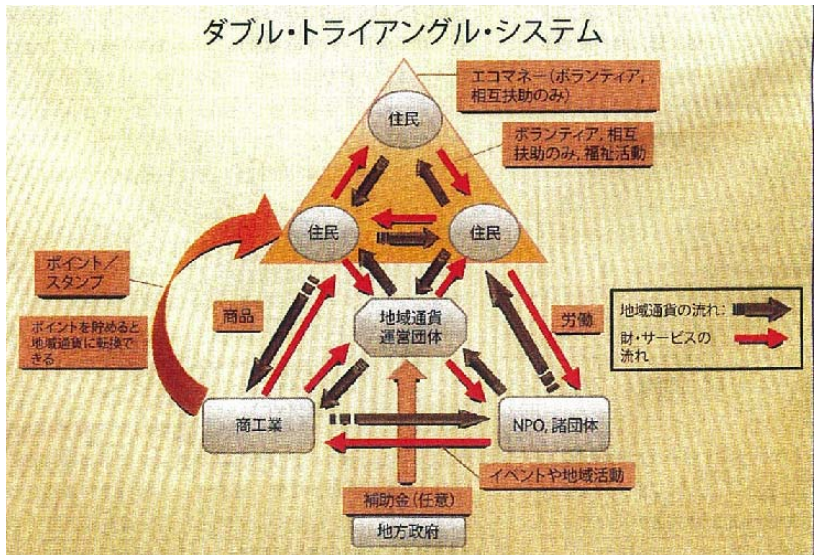
- ・目的: 地域経済の活性化と地域コミュニティ活性化の達成
- ・システム: 複数流通地域商品券と商店街買物シールの統合
- ・通貨種類: 地域通貨券(500P)とポイント券(2P)、1P=1円
- ・有効期限等: 6ヶ月未満、換金手数料1%
- ・発行主体: 苫前町、苫前町商工会(運営主体)
- ・商店=特定事業者(49): 事前にポイント券を購入し、販売額100円毎にポイント券(2P)を顧客に配布
- ・協力諸団体(12): 事前にポイント券1000枚ずつ寄付
- ・地域通貨券: 裏面に日付、名前、住所等記載欄

## <同システムの特徴>

- ・地域通貨購入インセンティブ: 500P券でポイント券5枚(10P)付与
- ・町内購買インセンティブ: 商店街での購入で2%のポイント券付与
- ・流通インセンティブ: 換金手数料1%設定
- ・流通促進: ボランティア活動にも利用可

## <同システムの成果と課題>

- ・流通速度: 5回/年強(>円の流通速度0.7回/年)
- 総取引額138万円強、参加主体272
- ・市場取引と非市場取引との相乗効果が検証された
- ・老人会や学校の巻き込み、漁協・農協、大手スーパーとの連携、等の課題も検出



資料: 地域通貨の流通ネットワーク分析 (西部忠 情報処理 Vol.49 No.3 Mar.2008)

## (参考2) 利子に囚われない世界ー志民通貨デザイン(法的チェック)

- 志民通貨導入と関連法規の関係チェック: 財務局等との調整は最終的に必要
- ・ 紙幣類似証券取締法: 「どこでも」、「誰でも」、「何にでも」の3つの機能は無く、該当せず
- ・ 通貨偽造罪・通貨及証券模造取締法: 「外観」が類似しない限りは問題なし
- ・ 前払式証票の規制等に関する法律(プリカ法): 現金を前払いして地域通貨を購入したり、地域通貨が記された証票が発行される場合に適用の可能性
  - ー 「前払い証票」とは、「相応の対価を得て発行される証票で、所定の財・サービスの購入に利用できるもの」を言う
  - ー 寄付に対しての発行、円貨への兌換が不可、であれば適用除外。仮に適用されても半年毎の未使用残高(=発行額)が700万円以下は届出不要(1000万円を超えると、半額を供託する必要)
- ・ 出資法: 減価による償還、会員間のみでの決済である以上、同法の適用は無い
- ・ 銀行法等: 為替取引や付随業務に当たるかは問われたこと無し
- ・ 消費税: 反復して利用される時には、円貨と加算して消費税の課税対象となる
  - ー 販促費とはならない。
- ・ 所得税: 地域通貨を報酬等で受け取った場合には、所得(一時所得、給与所得)に
- ・ 労働法: 賃金は、全額現金での支払いという原則との関係が微妙